

第9回「ことばフォーラム」
＜第2部＞ 第1会場

方言による授業作りの可能性

2002年3月24日(日)
山形県三川町　　なの花ホール

茂呂雄二（筑波大学）
佐藤武夫（三川方言研究家）
斎藤元弥（三川町立横山小学校）
佐藤栄市（横山小学校保護者）
甲斐睦朗（国立国語研究所）

独立行政法人 国立国語研究所

「方言による授業作りの可能性」—小学校の授業観察ビデオから—

(配布資料 : p. 1 ~ 3)

「授業における方言の役割」 茂呂 雄二

茂呂 「ことば」フォーラム第2部「方言による授業作りの可能性」を始めたいと思います。私は筑波大学心理学系の茂呂雄二と申します。どうぞよろしく申し上げます。私は大学に移る前に、足かけ14年ほど国立国語研究所にいました。そのときに先ほどあちらのセッションの最後にお話をされた佐藤亮一先生が三川町で町営住宅を借りて夏の間いらっしゃるといふそのときに押しかけて、佐藤先生にご紹介していただいて、三川の小学校、幼稚園、保育園などを見るということでこちらにご縁ができたわけです。そのときに撮ったビデオからいろいろ考えてみたことなどをもう少し広げて、きょうはこちら地元で実践をされている方々と一緒に方言について考えるということをしてみたいと思います。私はほとんど司会のような役回りであり話すことはせずに、これからご紹介する3人の地元の方、それと国語研究所の所長の甲斐さんとともにいろいろ方言について考えてみたいと思います。まず私の話の後にお話をさせていただくのが、佐藤武夫さんです。三川の方言を自らも研究されているということですが、三川中学校の方で週に一回「方言を考える」という授業をされているということで、きょうはそのお話をさせていただこうと思います。次に三川町立横山小学校の教諭でいらっしゃいます斎藤元弥先生に登壇していただきます。斎藤さんは総合的な学習を狙った、方言をみんなで、子供たち、クラスで調べてみようという実践をされています。そのお話を次にご紹介します佐藤栄市さんからお聞きして、非常におもしろい実践だと思ってお話を聴きに行ったりしました。きょうはその実践について、いろいろお話をさせていただけるということです。続いて、佐藤栄市さんにお話をさせていただきます。保護者の立場で斎藤元弥先生の実践を支えるという役割をされたというご経験があります。それと先ほどの佐藤武夫さんもそうですが、こちらの全国方言大会というのを実質的に運営されている三川トピアの3代目の委員長でもいらっしゃいました。武夫さんは初代の委員長なのです。そういう立場から授業における方言の取り組みというものを支える、あるいは学校と町の連携ということについてお話をさせていただくことになっています。最後に、それまでの話を国語研究所の甲斐所長にいろいろコメントをしていただこうと思います。と言いますのは話しことばの教育、これが書きことばの教育に比べるとかなり手薄な領域であると思うのですが、長年国語教育のお立場から話しことば教育ということについてお考えになってきた、そういう立場からいろいろコメントをいただく、あるいは話しことば教育の現状というものもご紹介いただきながらコメントをしていただこうと思います。それでは4人の方、前のほうの壇で仰々しいのですが、ちょっと前のほうに移っていただきます。きょうは時間としては1時間10分ぐらいあるのですが、既に7~8分私が話をしていまして、もう2~3分だけ話をして、後は4人の方のお話に移りたいと思います。

その後、最後に時間を少しでも多く残して会場の皆さんと一緒に方言について考える、あるいはきょうご発表の話を皆さんがどんなふうに使われたか、いろいろ議論を深めたいと思います。国語研究所のこの会というのはフォーラムという名前がついていますが、フォーラムですから本来のフォーラムの意味は、皆さんが丁々発止とそれぞれの意見を述べ合うということであろうかと思しますので、その趣旨にのっとってここではミニシンポジウム、1時間10分と大変短いのですが、そんなことでやってみたいと思います。まず私の方から三川でいろいろ授業を見せていただいて、そのときの話などを踏まえて、もう少し話をさせていただこうと思います。1988年から先ほどの佐藤亮一先生がこちらに来たとき一緒に来て以来、授業を見せていただくということをしているのですが、最初は本当に飛び込みで旧校舎の時代の横山小学校に、朝、突然に行って、何とか授業をひとつ見せてもらえませんかとお願ひして授業を見るという、そんな乱暴なことを88年に来たときにやりました。そのときに見た感想というのは、正直いって非常に驚きました。というのは、いわゆる方言と共通語というのを授業の中で非常にタイミングよく使い分けて授業を運営されている。教員の方も子供たちも、方言と共通語の間を行ったり来たりしながら授業を進行している。その様子に非常に驚きました。というのは、実際の授業をいろいろなところでそれまでも見ていたのですが、東京の方で見ている中でははっきりとは見えなかった言葉の使い分けというのが見えてきた。それはどうということかと言いますと、一つは授業というのは一本調子でずっと続くわけではなくて、山があったり谷があったりして、子供たちの注意が非常に集中して動機づけが非常に高まったと見える場面と、そうではなくてそれぞれの子供が自分なりの考えを探り出そうというふうに非常にリラックスした時間というのが、それが山あり谷ありで交代しながら、普通進行していくわけです。その中でまさに授業の動機づけというか、子供たちの集中力といったものが高まったり、あるいは緩んだりする、それと一緒に方言あるいは共通語、その間の行ったり来たりというのがどうも行われているのではないかと。授業における方言というのは、一つにはそういう役割を果たしているように思います。子供たちが自分の考えを何とか探し出そう、自分の経験の中から情報を拾い出そう、そういうときには自然と方言になっていろいろ考え始めるということをしているようです。ただそれをクラス全体で何か共有しようというときには、またいわゆる共通語的な言い方に戻ったりします。その往復の中で、授業の中で学習する内容というのか素材というのか、知識というのが獲得されたり、あるいは調べられたり吟味されたりする、そういうプロセスと、方言を使う、あるいは共通語を使う、そのことが非常に絡み合っているように思えました。その点が非常に新鮮だったわけですが、それ以来、授業の中での言葉の持っている役割というのに興味を持ちまして、かなりもう長くなりましたが、毎年のように三川の学校、あるいは幼稚園、保育園にお邪魔していろいろ見せていただいているということです。つい今月の頭にも学生と総勢6人で来て、三川の幼稚園、保育園

の中で子供たちの様子をビデオ撮りしたり、簡単なテストのようなものを使ってデータをとらせていただきました。また具体的な話は後で時間がありましたら、もう少しさせていたいただきたいと思います。方言の持つ授業における役割、あるいは授業を作り上げる時の方言の役割というののもう一つあるように思います。それは方言そのものについて子供たちと教師が一緒になって探ってみる、考えてみる、自分の使っている言葉というのはどういうものであるのかというのをいろいろ探りを入れてみる、その内容としても、方言というのは非常に重要なことになろうかと思っています。それを通して自分の言葉、あるいは自分が所属する地域の文化、あるいは大げさにいうと社会というものまで考え直す、そういう機会を方言はどうも与えてくれるように思います。それで第一番目のお話の佐藤武夫さんにバトンタッチして、三川中学での実践について教えられた立場からお話をさせていただこうと思います。それではよろしくお祈いします。15分でお祈いします。

「三川中学校における方言コースの実践」佐藤 武夫

佐藤武夫 こんにちは。今紹介されました佐藤武夫です。三川中学校の三年生の選択授業ですが、毎週水曜日ということでやっています。12年度から始まって、12年度13年度とやって4月から12月まででいろいろな選択があるのですが、一つの選択に10人前後です。私のところの方言教室の場合は12年度が15名で、13年度が13名ですが、女子が多いのです。男子が3分の1です。それで最初、方言についてということで話をする前に、生徒に聞くと、「方言なあんまり使ってねえ」、「あんまり知らねえ」、まずそういうのですが、ずっとやっているうちに本当によく方言を使っています。後で生徒が作ったものも紹介します。最初4月はまずだいたい方言とはということで、方言というのはこの地方にぴったり合った生活からにじみ出てくる生活語なのだと。例えば海岸、海辺なら漁村の方は魚とか海とか波とか船とか、そういう言葉にちなんだ言葉がいっぱいあって、山奥なら山の言葉、木とか動物とか植物とか、そういうものの言葉がいっぱい出てくる。それから作業をしているときに、その地域にぴったり合った作業に関係ある言葉が当然出るわけです。それでそれは方言というのはいい言葉、悪い言葉というのではなくて、その地域にぴったり合った、もう生活語なのだと。だから生活には欠かせない言葉で、その地方の無形の文化財だということから始めていくのです。毎週水曜日ですので、学校の行事がある6月と8月がちょっと少ないのですが、だいたい4、5回ずつ、4回ですか。5月はまず1人10個の方言を集めさせるのですが、10個の方言を集めて、書かせて、その意味は何かということをやります。その場では全然書けないのです。この次の授業まで10個探してくるように話をするのです。そしてまず1カ月間ぐらいは何とか10個から7個ぐらい書いてくるのです。一回目は10個、二回目ぐらいは10個書いてくるのですが、今度8個になったり7個になったり6個になってくるので、そん

なに長くやらないで、まずだいたい4月から5月。それから6月が今度、その10個ずつ集めてきたものを一人ずつ1番から10番までしゃべらせるのです。例えばくすぐることを「こちょばす」というのですが、「こちょばす」とか「やばつ」だとか「もっけ」だとかとずっと書いていく。それは意味は何だとかとしゃべらせて、それで6月になると、今度私が方言をちょっと文章化したものを2回繰り返してしゃべって、それを聴き取りして正しく書く。聴き取りをやって、それから今度方言の会話、AさんとBさん、あるいは自分とお母さんとか、そういう簡単な会話文を作らせます。そしてたまに方言大会のビデオを見せてビデオで勉強したり、そして9月になると方言川柳、そんな難しくない、簡単な方言川柳を作ってもらって10月の学校祭のときに方言の劇、3班ぐらいに分けて方言の劇、方言寸劇ですが、それを生徒にどういう場面を設定するか、だれがどういう役をやるかということをしてながら方言劇をします。そして最後にずっと春から秋までやったものをちょっと問題を作って、簡単にテストみたいにやってきました。それでまず子供たちが今、方言を10個ずつ集めてきた中でいちばん多いのは「めっこい」とか「めんごい」とか「めっこ」とか、かわいいということがいちばん多く出ています。それから「めじょけね」です。かわいそうだということを「めじょけね」というのですが、「めじょけね」と「めっこい」、「めんごい」とか「めんご」とか、そういうかわいいというのとかかわいそうだというのがいちばん多いのです。だから方言のそれを集めてきた中ではいちばんこれが多くて、子供たちの性格がここでわかってくるのです。本当に思いやりのある子供が多いということがまず発見されました。それでその10個を集めてくるのにも自分が普段使っているのは二重丸をつけてくるのです。そしてたまに使う、家族はいつでも使っているが自分はたまに使うのは一つ丸なのです。それから自分はあまり使わないが家族は使っていて、聞いたらわかるというのを三角にする。この3種類の印をつけて集めさせるのですが、そうすると「めっこい」と「めじょけね」がいちばん多くて、思いやりのある子供たちが多いというのが、言葉、方言の中から人の性格までわかったというのが私には大発見でした。それからさつき尾崎先生でしたか、「寒いっす」と子供たちがいうのとちょっと似ているのですが、例えば「食べれおけ」、食べるを食うというわけですけれども、その「け」と「く」、長く伸ばして「けー」とする子が普通多いのですが、「食べなさい」を「け」の前に小さい「っ」をつける中学生、最初に小さい「っ」をつけて「っけ」という子がいるのです。それがちょっと、今の子供たちはそうしゃべるのかと。だからつまって、「っけ」、「っく」とかそういうような言葉の音にならない、つまってしゃべり出す。「っけ」、「っく」と、そう書いてくる子がいるのです。それがちょっといい発見をしたと私は思っております。例えばこの地方では、「はひふへほ」の「ひげ」などは「ひ」とすぐ音声で現れないで、ふっと息を吹きかけて音が出ないようにして「ふいげ」と、こう入る。そういう発音をする人も結構いるのですが、この中学校の小さい「っ」から始まって「っけ」、小さい「っ」で「っく」と、こうなっ

たのはちょっといい発見をしたと私は思っております。それからこちらはアクセントはあれですけども、庄内弁の特徴としては、子供たちがおもしろがったのはほとんど口を開けないで、1ミリぐらい口も開いたか開いていないかでしゃべられるのだと。例えば県「知事」、道路「地図」、田畑の「土」、父親の「父」、それから牛の「乳」、この5つを書いて発音させるのですが、最初は「つち」とか「ちち」と口をはっきりやるのですけれども、庄内弁というのはそうでなくていいのだ、ほとんど口を開けないで、山形県でいちばん偉いのは県「知事」、道路カカッタラ道路「地図」、母親でない方は「父」親、そして田んぼや畑の「土」、それから牛の「乳」、そういうふうにして「知事」、「地図」、「土」、「父」と口をほとんど動かさずに発音できるのが、これが中間語の特徴ある庄内弁だし、こういうところをまず子供たちがおもしろがって、だんだん興味を示してきて、いやー、おもしろいのだなということなどは印象がありました。それから「け」と「ね」、たった2文字「け」と「ね」を書いて、この2文字でも意味が3つ4つあるのだと。「珍しいお客さんが来たから、いっぱい何かごちそうしなさい、食べらせれ」というと、「いやー、あれはさっきから食ったけ、あとけねぜ」と、食えないが「けね」というわけです。それから「遅くなったから早く帰ってこいよ」、「まだけねで」、帰らないとか食えない。「おまえ、いい時計すったにや、そんなふるすのおれさくれちゃあさ」、「けーねんな」、あげない。足りないというのも「けね」です。そういうふうにしてあるわけなのです。私の頭みたいに「毛ねー」とずばりいう人もいるのですが、「け」と「ね」だけでも4つ5つすぐあるわけです。それで今、「まだけね」といった場合、何をいつているかというのがみんなわかる。だからそういう意味でも、こういう話から子供たちに入っていっていったら方言教室がすごくおもしろくて、では川柳を書いてみれと書いて書かせてみますと、簡単な川柳ですが、「じいさんや急いで食ってはんばけるな」とか。普通「はんばける」などと子供たちはあんまり使わないのですが、おじいさん、急いで食って胸をつかえるなよということ、を、「じいさんや急いで食ってはんばけるな」と、そういうふうにはぽんと出るのです。それからやっぱり興味を示さないと出ないのですが、あと「味見した舌ば何だかどんけねの」、「どんけない」というのは味っ気がないなのです。それから「こげいっぺ食わせてもらってもつけたの」、「こげいっぺ」はこんなにいっぱい食べさせてもらって、「もつけた」というのは庄内弁の独特の言葉でありがとう、それからすみません、いろいろなものが入るのですが、さっきいった「めっこい」と「めじょけね」のほかに多いのがこの「もつけた」とか、そういうものなのです。「やばつ」とか「もつけた」が多いのです。「ちっちゃいころおまえらばよくうんつきだけ」、この「うんつける」というのはへそ曲げたです。こうして最初私は方言を使わないといった子が、これは女の子ですが、今度文章作りをさせたときに、私と母という交互で会話の文章を作ったのです。

「お母さん、服買って」

お母さんが、「この前買ったろう」
自分、「祭りさ着ていく服ねえ、おれ」
「だみだ」
「じゃ、お小遣いくれ」
「そげたことより勉強せえ」
「はいはい、あといいでや、ばっちゃんさ頼もう」
「ばっちゃん」
「何だ」
「服買って。お母さんけちで買ってけねやんけ。友達みんな買ったていうきけえ。」
おばあちゃん、「なんぼだなんぼ」
「うーんと 2000 円じゃねくて 3000 円。」
「ほら、これで買ってこい」
「わー、ばっちゃん最高だ」

こうして普段生活で身近にしているものをすると、どんどん方言を書いていくのです。まず一応大ざっぱに今までやったのを紹介しました。それで最後の反省の文に書いたのが、庄内弁の深さを知った、ためになった、わからなかった方言を知ることができた、こういうふうにして方言は心だということがわかった、こうして最初の出だしから見ると、みんな方言が楽しかったということが出てきてよかったと思っております。以上です。

「話しことばの重要性」 齋藤 元弥

(報告資料「横山の子どもの方言学習」: p. 1～7)

齋藤 三川町立横山小学校の齋藤です。私は三川町に勤務するまでは方言などというのは全く考えもしなかったのですが、三川といえば方言ということで実践してみました。横山の子供の方言学習ということでお話ししたいと思うのですけれども、コンピューターのプレゼンテーションを用意してきたのですが、ちょっとここでは使えないということでお手元の資料でお話ししたいと思います。まず横山小学校では総合的な時間での位置づけとして、どの学年でも共通に学ばせたいテーマとして総合学習という形で方言を位置づけています。その位置づけは、一応4年生のところで位置づけています。国語の教科書に方言と共通語という教材がありまして、その関連もあって4年生ということなのです。ちょっと古いのですが、1999年、現の中学校1年生が4年生のときに行なったものを紹介したいと思います。ふるさと方言について調べ、再構成することで表現方法を工夫して発信しようということです。情報活用能力の育成というもう一つの視点を持ちまして、実践しました。第1次ではつかむ活動です。各地の方言音声資料の聴取、それから自分の経験、インターネットの検索などで興味、関心を高めます。第2では交流を

するということで、方言と共通語というのは各教科書会社の教科書に全部載っているわけなので、それを使って調べてパネルディスカッションをして、共通語の必要性和方言のよさについて話し合う。第3次は広げる活動で、自分たちの方言について調べたことを表現し、工夫して伝えるということで、報告資料の3ページをごらんください。だいたい子供たちがやった活動はクイズ作り、テレビ番組作り、自分たちが調べたことを一つのプレゼンテーションにまとめていくという活動、アンケートで21世紀に残したい方言、それから紙芝居、カルタ作りなどがありました。3ページに載っているのは、左側がクイズというか、辞書を作成したのですが、児童は珍しい方言語彙に目が向きます。これはクイズなどを作る場合にはよいのですが、方言のよさや豊かさについて知らせるためには、日常の会話の中で何気なく使っているイントネーションや語尾表現について考えさせることでふるさと方言の柔らかさ、豊かさ気づかせる、そのためには詩が大変有効だったと思っています。右側がその詩ですけれども、「のおーのおーばちゃん」という、これは三川の子供が作った方言詩です。それは津軽弁とか共通語とか、それから山形弁に直して子供たちが読んで感じたことをテレビ番組にしているのですけれども、一つの方言詩をスタートにして、いろいろな地域の方言に直して、受ける感じを劇化していくのですが、番組には方言博士というのが出てきて、その博士はこうまとめていました。なぜいろいろな方言があるのかという話に、それぞれの地方の方言がその地方の人にとって生活と密着しているのだから大切な言葉、だから大切なのだ、大切にしていかなければならないのだというまとめ方をしています。どうしても特異な言葉に目が向きがちなのですが、私はこのふるさと方言のよさの一つに柔らかさというのがあると思うのです。語尾表現の柔らかさ、先ほどから何回も出てきているようですが、そのあたりを子供たちに知らせるには詩がよかったと思います。もう一つおもしろかったこととしてアンケートというのがあるのですけれども、資料の方にはないのですが、生活の中で会話はテレビに影響されています。そのため方言についての必要感には子供にはさほどありません。むしろ方言は自然になくなっていってしまうのだろうという感じがあります。しかし方言のよさを見つけるということは、もう一つ地域のよさを知ることでもあると思うのです。それで21世紀に残したい方言ということで、子供たちがいろいろ150名ぐらいの人に聞いたアンケートがあるのですが、先ほどのお話にもあったように「めっこい」とか「めじょけね」とか「こちょばす」とか「さまじ」とか、そういう言葉が人気がありました。これらの言葉は様子を表す言葉、それから気持ちを表す言葉で、そのまま共通語に置き換えることのできない言葉です。こういうことで自分の地域の方言というか、言葉のよさを感じて数値として残していかなければいけないなどと思ったようです。6ページをごらんになっていただくとわかるのですが、小5夏の自由研究からということで「私の愛する三川」、これは次の学年で発展したというか、四角の中を読むと、「方言では、私達がいつも使っている『んだの』や、『めっこい』という方

言に人気がありました。あたたかいほのぼのとしたところが方言のよさだとあらためて思いました。方言は地域ごとにちがうけど、方言には、方言しかない豊かな感じがあると思います。それが、地元の人以外にも伝わっていました」ということで、夏休みの自由研究で三川の人以外にインタビューをしていって、それで調査して、この児童はこういう結論を出したようです。それから4ページ、4枚目と5枚目に作文があるのですが、作文の中での表現としての方言の使われ方ということで、1枚目は読書感想文なのですが、けれども、「麻希や、虫から食わいでるども、一番うめあんがもしんねんぞ。」というこの一文なのですが、感想文の中の最後の文です。共通語での表現よりも方言で表現した方が背景が伝わるような気がしたということで、この作文では方言が選択されています。次の作文なのですが、「どうして、お父さん帰ってこないんだあー。」という文章、父の笑顔が家族の活力というところでは、冒頭の会話文が標準語で記載されています。この児童は大変方言を書くのが上手な、会話を方言でうまく使う子供なのですが、やっぱり全体のバランスから考えて、ここではあえて共通語を選択しています。方言がいいのか共通語がいいのかというのは感じ方一つで、効果についても不明なのですが、6年生ぐらいになると、だんだんと方言を書き言葉としての表現方法の一つとして考えるようになるのだということを出しました。今年度、横山小学校では民話を語る会という取り組みをしたり、三川町の方言大会というのはなぜ生まれたかというあたりのお話を聴くなどして、年々いろいろな実践が出てきているところなのですが、最後に私の学級で今年度、金子ミスズの国語の教材を読んだ後で、ふるさと方言の持つ柔らかさを何とか詩として表現できないかということで子供たちに読んでもらったものがあるので、それをかけたいと思います。

<録音テープ再生>

「はらのなか」 クサダヨシキ
かあちゃんのはらをさわったら
はらのながでうごいだっけ
ぐるぐるうごいだっけ
おなんこがおどっこがわがっね(資料P7原文は「おどっこがおなんこが」)
たぶんおなんこだの

「ばんけ」 ナガオカショウコ
にわでばんけの芽みえだ
ちっちゃい二つの芽みえだ
ていぼうさいぐどいっばいに
ばんけの芽だちがみえるだろう
ばんけたちは背比べ

みんながみんなおっきくなる

「たんぼぼ」 ヤマモトタイシ

ふわりふわりと風まかせ
どこざいぐにも風まかせ
ついたとごで育ってぐ

芽は人ならば子どものとき
うごげねども風がそよそよ
雨さも風さも耐えていて(原文は「雨にさ」)
本葉さなってつぼみでる

大人さなったら花が咲く
成人式の花がさく
一人ぼっちのおいわいだけど
花はとってもうれしよの

白いわたげは自分の子ども
無事に育ってよがったども
一人旅だとやっぱりしんぺだ(原文は「やっぱり」はなく、「しんぺだの」)
自分のようにがんばれよ

「自分とかげ」 スズキヒロアキ

いっつも人にふつついで
どっげにげでも追ってくる
毎日毎日同じやつ
ほがの人どもあるぎでの
みんなといっしょに(原文は「楽しく」)あるぎでの
楽しく楽しくあるぎでの
(どごさいぐにもついてくる)
(楽しく楽しくあるぎでの)
黒い服はもうあぎだ(原文は「黒い服には」)
別の服もきてみでの
赤や青のお洋服
(自分のようにがんばれよ)

<録音テープ終了>

7ページに原稿があるのですが、方言を学習する場合にどうしても記録することが必要になってきますが、それを記載するのが大変難しいと思いました。アクセント、イントネーション、そのニュアンスまで書き取ることは到底できませんでした。また書いたときに全く別物に変容してしまうという危険性もありました。方言はやはり口伝えで伝えていくのが大切だと思います。それから方言には地域の願いがあると思います。小さな町から大きな発信ということで、三川町は方言大会をやっているわけですがけれども、その方言を取り入れるという発想の転換が大変すばらしくて、町の活力になっていると思います。この精神は子供たちも引き継いでいかなければならないことですし、この地域の教師の使命でもあると思っています。以上です。

茂呂 では次に佐藤栄市さんから、今の実践とのかかわりの観点からコメントをいただきます。10分ぐらいでよろしいですか。よろしくをお願いします。

「授業実践を父兄として支えて」佐藤 栄市

佐藤栄市 どうもこんにちは、佐藤栄市です。今発表がありました斎藤元弥先生が方言に取り組むときに、ちょうどPTA、親という立場でいました。三川トピアで方言大会をやっていた時期でしたので、簡単に助言をもらえる人がいるということで呼ばれたということで、子供たちの方言の学習のお手伝いを少しさせてもらいました。子供たちの調べたものとか疑問に対して答える役だったのですが、本当は大人の質問を受けるより子供の質問の方がとても怖いというのを知っていましたので、嫌だったのです。何が出てくるかわからないという部分がありましたから。それでも親ですし、方言ということにかかわっているということで、その授業に参加しました。子供たちからは方言は将来なくなるのか、今どんどんなくなってきている方言が多いということを調べた中で発見して、問いかけられました。いろいろな生活や仕事の形態が変わってくると、言葉というのは使われなくなりますし、また新しい言葉というのが生まれているのです。そういうことを話しましたが、子供たちが実際、空気や水と同じように方言というのを使っているのですけれども、意識していなかったというのがあると思います。その中で方言を題材に授業で取り上げたということで、これも水や空気や今環境問題が言われていますが、それと同じように大切なものなのだとということに気づいてくれたと感じました。庄内弁はそこに住んでいる庄内の人たちしか受け継ぐことができないし、また伝えることができないのだということも感じてくれたみたいです。学校とさっき言った三川トピアとのかかわりということも話してくれと言われていますが、三川トピアで作った方言ビデオ辞典というのがあるのです。7～8年ぐらい前、それをダビングして各学校にみんな持って行って、使ってもらえますかということで学校にお預けもしています。それから方言や方言大会ということで、中学校へ2代目のトピア委員長のシダさんが話をしに行ったこともあります。そういうことで関わっていて、まだ私もトピアの中堅どころでいた

ころでしたので、学校へ行って授業参観などで見ていますと、授業の中にも休み時間も方言、庄内弁というのが学校の中で飛び交っているのです。そのときに、授業で共通語を使うのはいいのです、そのかわりできるだけ休み時間は方言を使ってもらえませんかという話をしましたら、それはできないということでした。それが7～8年前のことなのですが、2年ぐらい前から総合学習という形の中で、先生方もいろいろな模索を始めました。その中でやっぱり三川というのは方言だという下地があって、方言ということに各学校とも興味を示して、いろいろな形で取り組んでくれるようになりました。その中でさっきもいっていましたが、方言を授業に入れたり、方言カルタというのを横山小学校でも作っていますし、東郷小学校にもあります。トピアでもたしか作っていますので、私が知っている限り、三川にこれで庄内弁の方言カルタというのは三つになります。そういうふうな形になって、だんだん残ってきているのかな、子供たちも自分たちの言葉をうちの人から聞きながらとか、会話の中に入れながら、また伝えてもらっているという姿が見えてきていると感じています。あとは、いろいろな関わりの中でそういう活動をしてきたということで、夏休みの自由研究のテーマに方言というのを取り入れてやる人が増えました。それも三川ではない人たちから問い合わせが毎年必ず来ます。そのときに三川の図書館に本がありますから、そこで見てくださいという話をしたり、私のできる協力などもしているのですが、そういう形で三川でやっている方言というのが目に見える形で庄内全域に伝わっているのだというのを、そういうところでも感じる事ができました。あとそれから、先ほど尾崎先生のお話に丁寧語の割合などが出てきましたが、さっき授業参観の話を少ししましたけれども、小学校の低学年より高学年、小学校より中学校の方が授業にも方言が多く入っていると思っています。それには私の感じなのですが、子供たちも成長して、先生方が一人ずつ認めてつき合っているという感じで、いい感じで受け止めていますし、学校教育も方言を通すと、やっぱり心の触れ合いやつながりがうまくいっているのだという感じを持っています。私の方からはこれくらいです。

茂呂 それでは甲斐所長にお三方の実践やいろいろな取り組みのことについてコメントとお考えをいろいろお話していただきたいと思います。はい、よろしくお願いします。

【コメント】

甲斐 三川町に来て、方言の大切さということを取りわけきょう3人の方から総合的な学習、あるいはそれに該当するような授業を通じた活動を、今聴くことができました。大変結構だと私は思いました。というのは、方言というのが学習指導要領の中で取り上げられておりますのは小学校の4年生であって、それも今回の改定では軸はほとんど変わっておりません。今回のというよりは、ずっと変わっておりません。したがって教材も変わっていないのですが、ただ20年よりもずっと以前と、それからこの20年間ではど

う違うかという、この 20 年間は方言を大切にしようという方向に変わってきております。以前は方言というのはなまった言葉だから、なまらない言葉を使うようにしようという形になっておりました。あるときから、地域の言葉というものを大切にという形に変わってきているわけです。ところが、ちょっと遅かったかという感じはあるわけです。例えば、私は 15 年前に沖縄の首里中学というところに行って方言の授業を見たのですが、子供たちが授業中に使っている言葉は完璧な共通語でありまして、先生が一生懸命首里の方言を教えるのだけれども子供が乗らないのです。そういう問題があったわけです。その点、今 3 人の方の実践を拝聴しておりますと、こちらの方ではこちらの言葉、地域の言葉というものに対する愛情が非常によく出ているように思いました。実は国立国語研究所ができたきっかけというのは、国語の合理化ということがありました。提唱者の一人に柳田国男という方がいるのですが、この方は言語政策、共通語の方向へということをや非常に強くいわれた方でありました。初代の所長の西尾実と柳田国男というのはかなり対立すると。次の岩淵悦太郎、2 代目の所長もまた柳田さんと対立する。言語政策という方向に行かないで、言語生活の調査という方向に国立国語研究所が向かっていったわけでありまして、そこで数多くの、例えば方言地図とか文法地図というようなものが作られているわけです。そのところでそういう地図が、きょう井上さんの方から 1 枚プリントが中に入っておりますが、ああいう形のものを使って、あれが全国で押さえたもの、それを拡大したものという形でとらえていただくと、総合的な学習というのうんと進んでいけるのではないかと思います。それから先ほど 4 年生に方言と共通語という単元があると申したのですが、その単元とそれから総合的な学習における方言の扱いはどう違うかという、私は総合的な学習の時間に方言を扱っていただくことは大きな違いがあると思っております。それは方言と共通語というのはもう教材文があって、それを読んで、ああだこうだといっておしまいになるわけですが、総合的な学習の方は自分で集めたり考察したりということが出来るわけです。それがとくにまたこういう地域の学校の場合には、自分の地域というものを中心に据えて行うことができます。これが東京の場合でしたら、私は板橋区の授業を見たのですが、こんなふうなのです。皆さんの両親の出身はどちらですか、親戚はどちらですかと。この言葉はそちらではどういふのでしょうかということで、先生が宿題を出す。すると親がそこに参加するということで、全国の大まかな地図ができるという形になっていくわけです。私はそのときに、昔、日本語音声というプロジェクトのときに NHK が天気予報と桃太郎の二つを自分の地域ではこういふという、天気予報をそれぞれの地域で表現する、桃太郎の冒頭をそれぞれの地域で表現するというようなテープがあることをいって、それを使うことも薦めたことがあります。これは東京だからなかなか、きょうの三川のようなことができないということがあったからです。きょうの斎藤先生のところで私が大変関心したのは、1 枚目のいちばん下、左側の四角の中に「方言の持つよさを一つ

一つの珍しい語彙ではなく、全体としてつかませるために……」という言い方が、そういう見方が出されておりますが、こういう形で方言というものをとらえていけるということは大変結構なことだと思っているわけです。それからあちこちに飛んで申し訳ないですが、きょうの司会の茂呂さんが長い間三川に来て、子供たちの授業を録画している。そして前に話してくれたことは、授業中の言葉と休憩に入ったときの言葉がぱっと切り替わるということです。これがきょうの先ほどの第1部で尾崎さんが発表した校長先生と友達にいう言葉の違いということと共通してくることだと思っております。したがって方言というものをとらえていくときに、私は授業をできないわけです。私はこちらの言葉が使えないわけだから。そこでどう方言をとらえていくとよいかというと、やっぱり地域の方が自分も方言を使って、そして子供たちと立場を同じくする形で引き出していくことができるのではないかと思います。最後に一つ紹介しますが、今年度旺文社という出版社が学芸コンクールというのをやっています。その詩部門で総理大臣賞をとったのが方言の詩でした。おじいさんの手はきったねえとかいう題です。私はその担当だったものですから、これはよいということで取り上げたのですが、やっぱり方言というのは大家族制というような生活スタイルが関係してくるということを、その詩を読んでも思ったのであります。以上です。

【質疑応答・ディスカッション】

茂呂 はい、ありがとうございました。あと多分10分ぐらい時間があるのではないかとと思うのですが、今のご発表とコメントそのほかご自分の調査や実践などのご紹介でも大歓迎なのですが、フロアの皆さんから質問やコメントなどをいただきたいと思いますが、いかがでしょうか。指名のような感じですが、佐藤さん。

佐藤亮一 なるべく三川町の方からご意見を伺った方がいいと思うのですが、きょう佐藤武夫さん、斎藤先生、佐藤栄市さん、3人のお話を伺って私の感じたことを一言申し上げたいと思うのです。まず佐藤武夫さんのお話については、中学で何回でしょうか、5回も10回もにわたって方言の授業をされる、こういう授業をやっている小学校、中学校というのは聞いたことがない。確かに国語の時間に方言と共通語という単元はありますが、恐らく1時間か2時間ぐらいで済ませているのではないかと。これだけ集中的に方言の授業をしているというのは非常に素晴らしいことだと思いました。私は東京女子大学の言語文化学科というところにおりまして女子大生を教えているのですが、全国から集まっています。私が方言の話をするのですが、ほとんどの学生が方言は汚いものという意識を持っているのです。言語文化学科に来ている学生がそんな意識では困ると私は思うのですが、結局これは考えてみると、小学校、中学校あたりのそういう教育というところに方言のよさというものを教えていない、感じさせていないところにあるのではないかと。だから恐らく佐藤武夫さんや斎藤先生のような方の授業を受けた方は決

してそういう感覚を、そういう方言に対する偏見を持たないで育ってくるのではないかと思うのです。しかし、日本の現状はほとんどそうではない。そういうところに佐藤武夫さんの授業の貴重さ、斎藤先生の授業の貴重さというのを感じました。それから斎藤先生のお話の中でちょっと私が感銘を受けたのは、感銘というかいいお話だと思ったのは、方言の詩を作らせているということです。方言は、これは斎藤先生がお書きになっていらっしゃるんですが、音声であり、イントネーション、響きがあるということですよ。そういう詩を書かせることによって方言の持つ微妙な意味、そして方言の持つイントネーション、音声、そういうものまでも表現することができる、あるいは表現する能力を養うということは本当にすばらしいことだと私は思いました。ぜひその作らせた詩をお互いに読み合って鑑賞するところまで高められればいいのではないかと思います。それから佐藤栄市さんのお話の中で、これは私は前から知っていることではありますが、三川トピア委員会が方言ビデオを作っている。この方言ビデオは非常にすばらしいものだと思います。方言というのはどういう場面で使われているかということが非常に大事ですが、単語だけ並べても、私はいわゆる方言辞典を随分作ってきましたけれども、実は単語だけ並べて意味を書いてもよくわからないのです。それはどういう場面で使われたか。そうすると、そういう意味では三川トピア委員会が作られた方言ビデオというのは3分間ぐらいの寸劇のなかで、例えばミカンを食うと「まぐまぐでゆう」というのはどういう意味かよくわからない。ところが3分間の劇の中で、最後に「まぐまぐでゆう」というのが使われる。そうか、「まぐまぐでゆう」というのはこういう場面でこういうふうにするのだ、そういう意味で三川トピア委員会が作っている方言ビデオというのは非常に貴重なものだし、今後私たちがどういう方言資料を残すかというのを考えていくときに方言詩であるとか、方言ビデオであるとか、そういうものをもう少し考えていかなければいけないということを感じました。私の感想です。

茂呂 ありがとうございます。そのほか、どうぞ。では、はい、どうぞ。

参加者1 ここの部屋の話題とちょっと関係なくなるかもしれませんが、全体の感想です。私は余目（あまるめ）で、さっき庄内方言の特徴の「ノー」と「ノ」ということばを聴きながら思い出したのですが、余目では「ネアー」という、「ノー」を「ネアー」、「ネア」、「ニア」、「ニャー」というふうにして、ちょうど猫が鳴くみたいに「ニャー」というふうにするのです。それでついでにしておく、その系統が新庄にもあって、川沿いにずっとマメガツタサレテ(?)余目にあつて、そして余目から海の方に行って浜中に「ネアー」ということばがあつて、そうすると、あー、言葉がこういうふうの流れていくのだということを考えてたりして興味深かったのですが、それでなくて私は体験で、子供のときにいつも「腹減ったにゃー」、「きょうどこさ行ったにゃー」とか、そのように「ネアー」といっていたのです。そういうふうには私たちが子供の会話が常に行われていたのです。あるとき私がたまたま「ノー」ということば、ここにある「ノー」というの

を使い始めたのでした。そうしたら先輩たちに囲まれて、そしておまえ、生意気だということですごくいじめられたというか、今流のいじめの対象にされました。つまりおまえはわれわれと異質の世界になったということで、非常に嫌な思いをしたことがあるのですが、それはたまたま、「ノー」というのは庄内全体では「ノー」と使っているし、年をとってくると次第に文化圏が広がっていくものですから、少し覚えていくわけです。そのときに自分たちの生活語の中でなくなって、自分たちの世界から外れてしまうといじめられるということがずっと言葉の世界の中にあった。そういうところが今の若者が若者の言葉でないものを使うと別の世界になっていく、その辺とかいろいろ、きょうの話の中につなげるのかわからないのですが、そういうすごくつらい体験があったので、そういうことも言葉の中に、つまり方言の中にあるのだということでもちょっと感想を述べました。

参加者 2 方言を撲滅してきた片割れでありますNHKに勤めております。佐藤武夫さんのお話の中で、子供たちの発音が少し変わってきたというお話がございました。ちょっと「っ」がつくというような、ああいうのを聴いて、斎藤先生の詩の朗読を子供たちがしているのを聴きますと、あれが本当の今の音声なのかどうかというのはちょっと疑問を持ちました。というのは、やっぱり書いたものを読むというのは非常に難しいです。ですから多分あれは子供たちが詩を読んだときの音声で、詩を歌ったときというのでしょうか、心の中からぽんと出てきたものとはちょっと違っているのではないか。それは以前に国立国語研究所のおやりになった桃太郎の話もそうです。実は桃太郎も、あれは原稿をほとんど読んでいたので、子供に語りかける音声ではなかったということがあるのです。今方言がどんどん変わっています。とくに音声の面で変わっているので、斎藤先生の授業の中でもこれを正しいといっはなんですが、どうやったら方言としてのいい音声になるのか、標準的な三川の言葉になるのかというのをこれからご検討いただくと大変ありがたいと思っております。また敬服しております。ありがとうございます。

茂呂 ありがとうございます。こちらからは何かありますか。〇〇さんにやはり私と同じような授業調査のことを、ちょっと発表してもらいましょうか。

参加者 3 ありがとうございます。天童市に住んでおります教員の〇〇です。先ほどのご発言をお聴きしてなるほどと思いましたのは、やはり方言というもの、同じ山形県の中でもいろいろな違いがあるということです。私が最上地域の小学校に赴任したときのことですが、随分方言同士が違って、「先生、随分なまってたにやー」といわれて、「先生もなまってたけど、みんなも随分なまってたぞ」などと言ったときから何となく、それぞれ違う方言であってもそれぞれのよさがあるのだということで、地域の人ともちょっと親しみを感じられるようになったものでした。ですから方言によって授業作りをするというのは大変打ち解けた学習空間を組織できるという点があると思います。そしてもう一つはやはり方言という閉じられた世界としてとらえるだけでなく、それぞれ

のよさを認め合うという、そういった一つの窓口にするということも方言を取り扱っていく、方言を大事にしていくということにも含まれていくのではないかと思っています。きょうは本当にありがとうございました。

茂呂 ありがとうございました。ちょっともう時間がいっぱいいっぱいになってしまっていて、このあたりで閉めなくてはいけないのですが、私もお三方の実践の話を聴いて非常におもしろいと思いました。特にいずれも文字の世界と音声の世界の往復というか、そういうことを媒介にして方言について考えるということ、私の専門は心理学、認知科学なのですが、子供の知的な能力を高めるというときの一つの素材として、そういう音声の世界と文字の世界、これははっきりと、ぴったりと文字がすべての音声を表せない、そんなようなところで子供の知的な営みが刺激されて深まっていく、そんなきっかけにもなるのではないかと思って、認知科学的な観点からも非常におもしろいことがやれそうだな、あるいはもっとやってほしいと感じました。大変短い時間で、皆さんからもさらにいろいろご意見などがあるかと思うのですが、これで今回のミニシンポジウム「方言による授業作りの可能性」を閉じたいと思います。どうもありがとうございました。

<終了>